

「教学と現代9」(海外伝道特別講座) 報告: 第1回

金子 昭

標記の講座が1月29日、天理大学研究棟第1会議室にて開催され、天理大学及び天理教海外関係者など約70人が参加した。この講座は、本研究所が天理教教祖130年祭(2016年)までの今後3年間の企画「海外伝道の現状と課題シリーズ」の第1回として開かれたものである。

このシリーズ講座のねらいは、海外で本教の布教拠点のある国や地域の拠点長に、現地リアルタイムに起こっている社会状況や布教伝道の姿を語ってもらい、あわせて本研究所にどのような後方支援を期待しているか、その要望を聴くというものである。

今回は、「アメリカ・ハワイ・ブラジル伝道庁長に聴く」というテーマの下、これら3つの国や地域の伝道庁長にそれぞれ現地の布教伝道の現状と課題について報告していただき、その後3人の庁長を交えて総合討議を行った。

これらの国に共通するのは、天理教の教えが最初期には主として日系移民を対象に広まったことで、世代を重ねるに当たって現地の人々にも布教伝道が行われるようになってきたということである。

深谷忠一所長による開会挨拶に続いて、担当の金子昭が趣旨説明を行った後、第1講として、深谷洋アメリカ伝道庁長より「アメリカの布教伝道の現状と課題」について発題。ロサンゼルスにおいてアメリカ伝道庁が設立されたのは、1934年(昭和9年)であり、来年(2014年)には伝道庁創立80周年を迎える。

深谷洋氏は2010年に11代目の庁長として就任。現在、アメリカ伝道庁管内の教会数はカナダも含めて62カ所、布教所数は69カ所ある。深谷庁長は、広大な管内の教会やようぼく信者の丹精について、その課題の大きさと庁長としての重責を強調。アメリカでは伝道庁のある西海岸と、ニューヨークセンターのある東海岸とで、それぞれ「Three Day Course」を実施するなどの状況を説明した。また教内の次世代の育成に力を入れると同時に、アメリカ人・カナダ人社会への布教伝道をどのように進めて行かが課題であると述べ、同性婚や臓器移植などの社会問題について天理教としての研究と発信について、研究所への期待を表明した。

第2講は、浜田道仁ハワイ伝道庁長による「ハワイの布教伝道の現状と課題」。ハワイ伝道庁が設置されたのは戦後の1954年(昭和29年)である。来年(2014年)には伝道庁創立60周年を迎える。

浜田氏は2001年に7代目庁長として就任。現在、ハワイ伝道庁管内の教会数は34カ所、布教所数は39カ所ある。社会状況はアメリカ本土とオーバーラップしているところもあるが、固有の問題もあるという。ハワイは観光産業で成り立っている島であるが、それだけに国際紛争などがあるとその打撃は大きく、暮らしも外から見るほど楽ではない。かつては日系移民の割合が大きかったが、近年フィリピンの移民も増えてきて、移民社会の状況は様変わりしつつある。天理教の教会も戦前からある教会が3分の2を占め、すでに教会本部に名称をお返ししたところもあり、浜田庁長としては、世代交代が大きな課題であり、基本的に個人主義的な社会風土の中で、信仰をどう次々に伝えて行かが重要であると認識していると述べた。

またそれと同時に、キリスト教社会にどう楔を打ち込んでいくか、「にをいがけ」(布教伝道)の方法について模索中であると述べた。

第3講として、村田雄治ブラジル伝道庁長が「ブラジルの布教伝道の現状と課題」について発題。ブラジル伝道の歴史は日本人移民の歴史と共に古いが、伝道庁が設立されたのは第二次世界大戦後6年目の1951年(昭和26年)である。2011年6月12日、真柱夫妻を迎え、創立60周年記念祭を執り行った。

村田氏は1993年に2代目の庁長として就任。現在、ブラジル伝道庁管内の教会数は89カ所、布教所数は315カ所ある。ブラジルの宗教は、かつてはカトリックが9割以上を占めていたが、現在は6割程度になっている。本教の布教伝道の進め方は、日本国内と同じように、パンフレット配布や戸別訪問が中心である。

伝道庁としての教化育成活動は着実な歩みを進めている。教会本部修養科と同じ資格が与えられるブラジル修養会は、1962年に伝道庁で第1回を開催して以来、昨年(2012年)までに105回開催し、受講者総数も6,155名になる。最近では信仰初代も増えており、ようぼく信者の8割は日本語が分からない。そのため、村田庁長は、歌って踊れるポルトガル語の「みかぐらうた」の可能性の検討なども視野に入れて、より現地化を目指しての動きを進めていると述べた。

最後に、佐藤浩司主任の司会による総合討議が行われた。これら3つの国や地域で、世代交代により日本語が通じない人々が増えてきたが、その際の教化育成や布教伝道のあり方、また文化事業等の可能性などについて、活発な質疑応答が交わされた。深谷所長は、閉会挨拶の中で、この講座が今後の教学協働を進める上できわめて意義のある出発点となったと述べた。

本誌では、来月号より各庁長の講演の要約を順次掲載していく予定である。

(3頁からの続き)

全体の43%にのぼるが、いずれも徳島県の撫養系伝道者によって始められた。撫養大教会初代会長土佐卯之助は山口県佐波郡(現防府市)出身で、撫養系統の人たちは師匠の郷里に天理教を伝えようとしたのだという。

明治25年と26年、撫養の役員岩朝脇次郎は九州布教の途次、山口県佐波郡右田村で視察を兼ねた布教を行った。明治27年には本格的布教のため青年布教師古川太十郎が派遣された。古川が短期間に成果を挙げたので土佐卯之助は名東の柏原友吉と相談の上、古川に加えて5人の青年を山口布教に送る。この結果、古川ら4人は佐波村(現防府市)に明治28年防府支教会を、三浦文平、管川峯次郎は高森村(現岩国市)に同じ年、周東支教会を設置した。現在、防府市周辺は防府大教会系統が多く、岩国市、周南市周辺は軒並み周東大教会の教会である。

防府と周東より2年も早い明治26年、県北の萩に萩出張所(現北長門分教会)が奈良大教会の布教師により設置された。これが山口では最初の教会である。

その他、山口県については書くべきことがたくさんある。下関など県南部は教会が多く、周防大島(屋代島)は人口の少ない島に15カ所もの教会がある。いつか書いてみたい。

(前号の記述を訂正する。「木岡義八郎」は「木岡儀八郎」、また鳥取分教会の設立は明治28年ではなく明治26年。)